

## リーフチェック串本 2018 調査結果の評価

リーフチェック串本 TS 野村恵一

リーフチェック串本は 2000 年から世界的規模のサンゴ礁監視活動である「リーフチェック」に参加するとともに、2001 年からは串本独自の調査対象種も加え、串本の海の変化を捉えるための調査活動を展開しています。今年はリーフチェックに参加してから 19 年目、串本独自の調査を始めてから 18 年目を迎え、去る 6 月 2 日に調査が実施されました。

今年の調査結果のまとめと年変化を表 2018 に、代表種・代表群の年変化を図 2018 に示しました。今年は黒潮の大蛇行と大寒波の影響で異常な冬期低水温（特に 2 月）に見舞われました。このような低水温は 1984 年以来、35 年ぶりとなる現象で（図 2018-3 参照）、多くの生物でその影響が認められ、特に貝類・ウニ類・サンゴで顕著でした。3 m 地点で最多で 299 個体を記録したニシキウズガイは本年は出現が確認されず、サンゴ被度は過去最低の 18.1% に激減し、ついに往時の 1/4 となりました。10m 地点では最多で 1635 個体を記録したナガウニは 22 個体を数えるまでに落ち込み、サンゴ被度は過去最低に並ぶ 4.4% に低下しました。調査開始以来、生物量の落ち込みが続き、毎年、今年は落ち込みの底であると予想し、次年度に期待してきましたが、どうやら本当の底は黒潮が大蛇行した今年であったような感じがします。

RC 串本調査もほぼ 20 年の調査資料が蓄積し、ようやく生物の動態の流れが理解できるようになってきました。串本海域は 1990 年代以降、黒潮の接岸傾向が続いて高水温現象が継続し、それに応答して南方系生物の定着・増加が進み、そのピークが 2000 年頃であったようです。それ以降は徐々に高水温現象は解消方向に転じ、2011 年より平年並みにほぼ落ち着いています（図 2018-2 参照）。世は地球温暖化のまっただ中であるはずなのに、なんでこんな逆転現象が起きたのでしょうか。それは、「現在は地球温暖化の停滞期（ハイエイタス）で、ハイエイタスが 10~20 年続いた後に再び温暖化が加速する」と説明されています。

この秋には黒潮が再び接岸に転じることが予想されており、生物の回復が進むことでしょう。また、ハイエイタスが解消すれば熱帯化も加速し、RC 調査において大きな変化が認められることでしょう。それを検証するためにも、無理せず、コツコツとデータの蓄積を積み重ねていけたらと思います。最後に一言、将来確実にナガウニ君のカウントに奔走させられる日が再訪しますよ。